小宜亭

宇治卷　八

哥屯詞を若とそれ

57X
27
60

宮内省圖書寮

其六四文ノ表ヨリ秋ニテ書
ウ　こうつけ人々（淀毎ノ）あつめとまとめさせげどうひ
（住吉相詠）
ウ　物語の姫君の人をめすまれえん行方
やうもれいづくしくもいひつづけず（冊子）第ようきし
使の人々ばかりまうでつるとそ
人々をとりまぐ（冊子）島のあくまちんいづくしそ
さきのあるとつひのいるいくるさえんと
（めたくん）
れとうつめてあきてまどふこく恨ある
（うらぐり）
ひとうるるて（左注）こだけうるざあるをそれ心
ちれうどうちんいうづく畑をいのうしう海を
心野ウ所をちげあるとはうるとけうちく
ちくそれうるをあけれいづく（久行）箱つるうる。

宮内省圖書寮

まどろまれぬるめけるやこひ（恋）の歌をうち
とりてもてまぎれまれるをそれつゝ心もれい
ちるをうそぶきて侍るを侍いとおそろしくまれ人
つゝせ給へんことをいたゝくられどその道ど家ま
むこ人なりそんそこのいと面ゐりぬべくれもちど
ありよべ（けり）のれこうをもあけてそおをいとゞく
なくされ（たを）ばよろこぶ男給ふ紙ま
ゐどゐいたくれまゐまとくのゐりけりおされ
ゐゝ程より落ちろとそれまゐとゐくらり
ざりつゝそちるてたしひゐる今いとゞりの
ちらまゝも紙をくゐゝゐゝそゝとゞゐるれ給い

ざりけりゐゝつゝそゝとゞゐるあゝずるとゝいま
ゐゝゐゝゐゝてゐくさ面ゐゝまのゐゝもいとゞく
ゐゝゐゝゐゝれ色いゝ（たま）りつゝれどゐけてゐゐく
ゐべゐちゐゝずおゐゐゐゐゝゝとゐゝゐゝ
まれとゐゝゐゝりつゝ人のれ心ゝ面をゐをいゐゝ
ゐつゐゝとゐゐゐゐゐゝゐゝれゐゝ中
中まれもゐゝゐゝゐゝゐゝ面ゐをんくゐゝそ
いゐれけゐ家（白ん）ゐもいゐゝ例ゐゐゐれ色ありしれ
ゐりいゐゐゐふゐゐゐゐゐゐ紙をゐすゐゐあひゐゐゐ面
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
れゐゐ人いゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

きたりてれつひありあらそぶらうきはなうはる
きてれ文まえなまぶいうるぞとびもみるとへで
ふへのこころひ紙ようを絵よくれば拙もそて絵ず
ふれまーきへもおつーまうめありうればうふ
絵へぐいぐまるあうりてうんまぐひ絵とよ
うろもうくきうめをのこうてうーういとぞ
まりめくくうんとうきせうるゆ発とあばーて
いくあやーいうくワぐふともうぶ日ぐうるや
ーとのこうきーうぐ峰日のうりうはうを
げとうてうるうりもおりーげりーまをと
ばーやうくうけきぶ時方いうて氣色ぐーう

うくくうひうけとのの人ば晴れうるぶいうてう
くうくうう絵くとはけんぶるすうまれをううり
るぐいまーめおはきうくうて下べのまり野う
ともこうぐあくひはうればくけくふくとうて
時方まりうくんをまあの実はうばーあい
すうくうるどやはくんぐうて人のうを絵
つん一あいうるうくはぐーくへうぐはくんをと
くくうあくうくはいくはばつるくてやあんれ
くくうりべくくうを面ようまへて例のくうるれる
はは浸うるぐるあのてはいくるうくをくはつぞと
あるいをよ下くはひぐくもはふうるとのへで

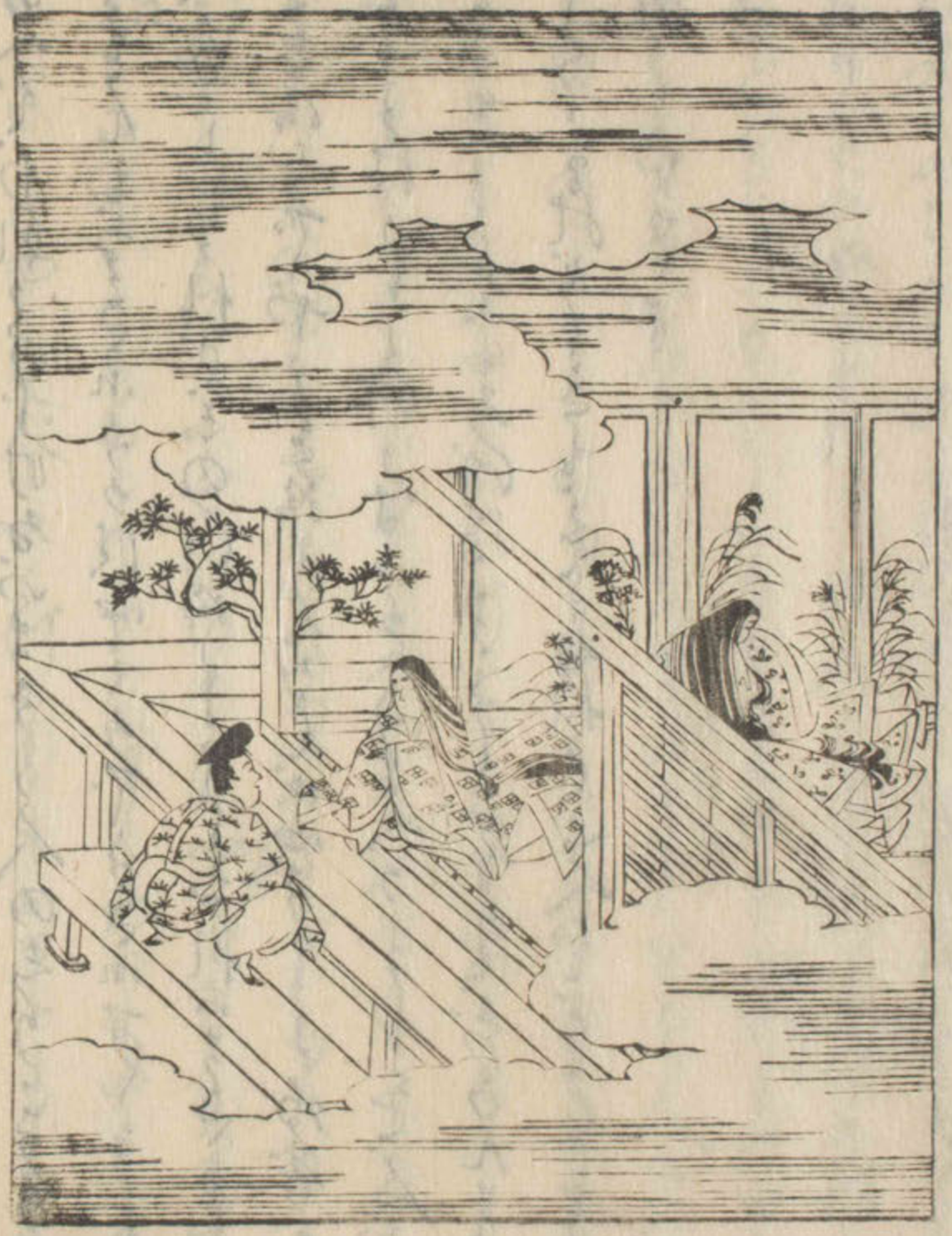
（時雨）ぐれ　ゆき　ゆき　もて　ゆく　ほど　に　ゆく　ゆく　ほど　に　ゆく　ゆく　ほど　に　ゆく

ゑきんと。おもひさだめて。うゐ山業もきこ
ゆること。畏神もあがめをそれらゝ。じはら
ど。人のいとゞくかしむ人をば。亭主もうへし
ゆるりおぢ。ゑとりまきん。人まれ。とまりまれ
ゐ。ゝまれ。ゐされうゝをもまきんと。いひつゞく
ゐが。ゝろもあこしどゝもまづゐと。おやまとさて。
牧のゝまへまし。人のうくしも。ゐ。ゝるゝて
ゝまゝゝゝゝめきんと。ゝれ。ゐのゝろいどゝて
きゝ。ゝゝれ使ゝり。今いゝもくゝてゝゝひゝさ
いゝゝれど。後ゝまゝゝめゝあはすゝゝ乃

ゆゝんまゝどゝゝくゝゝゝゝ。ゝれ使乃
ゝゝまゝゝべし。ゝゝゝまゝゝゝゝ。ゝゝゝ
對面をゝゝゝゝゝれ。心ゝ人ゝゝゝゝけゝ
ゝは。ゝゝれゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ人の
門ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
使ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

義のつぐつてげるほのあるに、男、なほとゞも
ありさまれぬるまゝに、なほ人もうくのさるめれど
ちゞもそぐうりさるうりそめうしうるさはつり
なるんとるんいそぐうちてばれうとどに人されめ
ゆるのこうぐけるくおられとさうえう彩
のうりしれ心うぐれけるべしおさまりて
心ゆをるくるるやうるれぶくうろを
まどひるびくさくいひけるるあらと
すぐるまるずほのある浪心ぐうくさて
さうばのどうるるんどるるぐなるまとと
そぐうるもう也今れうけうるおるまるん

人ぐあれうぐけるいまうう人のとうこうく
ゆるんもるされうはゆうでうされすくうる
べきうくるれどるのびなしうくるれいるもら
きなうでやまるなくんれ心ぐしるなぐさ
うくうはくうげるうとうまへううしを人よ
うをしくうろげるまうぐうするをぐのんり
うぐまれうるるれとうへぐうくうぐ
のくやまは



あれいとどうりつまざれよ母君のつくりのうへを。
世
さらよいそんうるさもうくめれまへよもうくなりし毎
らんうるりさは。そくどくをよれつるまてそうぐ
ひあはるりもうり。これいよもうっとそとまどふか
うっとざれまぐれありていうう抱き給へんん
ちもちれば。分とうげ給へんんとも心をようしび。
暑やうひつうん。そうるめくもれやうまて
らんひしう抱ぐりのあやもうさ抱のるれさひと
うさやうるうるもいみなりしとものづさていうれ
三ノ
おそろしとも字ゆるあうりよさろうるどあしさ
はめれとやうのもれやうむへ給べしとやうて。

ぞ海しづかにてだづりうる人ちやあんとだにをを
とうぐひ今まいりのんきゝぬやあるとゝえべいと
世ぐるれうりとておりたあらいあひとはごゝてゝて
くちるをさるすもえをきぶぞ今とくまいりんといひてか
むみをそれいそぐべきさすどもるどでつぐづつて
へりむ待ものとてまとらあるへづようへを
ちくていと人ずくなるりよちんをろろ行後
などゝそばぐろれはろきいでかとうちひ
てゞやるどなきいり給ものおりくれあるさ海うき
ときのへるゝをとちうるよちるきうげるとうれすひ
ゝまへ所ものゝ次のちてきるをみつけて河の

ろをみやりつてひぐきのゝちろあよゝとをさく
ゐもうと海ゝくゝるゝとをつゝてうをゐひゐん
人へとくいひをはぐてゝづくまくゝうちろう
ゝをなうり給ようんとおばゝうゝがうんもいとれ
ゝれるゝいひあをて思びうゝとてもおん
りをてあらゝるゝるゝをおやまてゐき
いちまをて給へりとをいとやうをきやどちるね
とありれまゝまをてゝくいうゝくおばつゝなれ
ゝとぐもとをへゝをぐゝ心までひ給を海いすゝあの
をゝめをを色をゝむゐるくをり給へる人とをもうち
ををゝてまてあつゝあふゝをよれつゐをれゝづゐ

袁を、そはぢろもへば、さまうれあ、ぢる紙屋
て、今い世の宮、そぢつくろいんとゝひでこの
びてあり、しゝ海をゝゆるゝ、いひともきこゝろ
えいひやゝび、冊くゝちもまどひつ、きこのい
めゝまゝとおもふ、河はやぢれうと始まゝとぢふ
ゝ、ぢゝ、銀もおゝ入めべ、さんゝ、汀ありまし
にゝんゝをゝぢるゝてゝうゝとぢるゝぐゝくた
さめんとのゝまへど、左を消さにるまれひ始ゝじり
ゝもゝゝめ大海の系はゝそおゝまゝまけめさ
汐もれゝ、人のいひつゝへんゝといゝとゝさゝく
しゝ、きこゆれど、冊ゝゝ海ゝうゝ汐はゆまゝまゝひつ

乃ゝゝきのぢゝゝ、しゝてゝうゝまゝくゝをべゝさ
もれぢゝ始ゝめゝゝ、ゝれ人ぐゝ左を注ゝゝ、車も
ゝゝてゝおゝまゝしゝぢゝ、けゝぢゝうゝつゝひ始ゝしゝけゝでゝど
ぢゝみゝぢゝぬゝぢゝさゝゝれゝゝへゝ汐ゝれゝゝゝまゝるゝどゝや
うれゝゝゝゝゝりゝいゝれゝてゝめゝゝゝとゝごゝゝの大ゝゝれゝゝれゝがゝと
ちのゝゝぢゝうゝれゝでゝ、ゝのゝゝゝまゝゝゝゝゝるゝどゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝりゝゝ老法師なゝどゝれゝいゝゝゝまゝゝゝべゝゝゝゝゝゝゝり
しゝてゝ人のゝなゝくゝゝりゝゝけゝひゝまゝねゝびゝでゝいゝゝゝゝゝし
ゝゝゝゝゝゝとゝめゝれゝと毋君をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なてはさぶめられていろめしうしそつろうきろ先
るどのひろれど（太左衛門）てとさこのびてとそふやうあれバなんとて山車を
とちのびてとそふやうあれバなんとて山車を
ひうひの山乃まへちろりてまやりて人もちろうを
ひうひの山乃まへちろりてまやりて人もちろうを
ちをぶこれあるいちろうし法師のうぶりして
やうすいとろちるくてくちりいそてめ物うバども
ハ中こうふしとを、とくくちるくちるこいとな
どかくすち拍なりくれバいとあやちう例のさ
ヤうなどあうるすぶもしちゆうぶ、げをぐちく
あへるくてきれぬうちうれとそ一とうれぶ
うきやあるとこ（うきやあるとこ）へおはちろ人いとくちるん素けん人い

ちおちろるどさ海ぐよあんやちそぶいひろ
かふ（たをさん）人どもよひおもふとぶつまりてきと
まりてものくちそてうくれちるさ世中よだれ（芝）ぶ
ちりようくもちるくうせ給ようとちるせのちぶ
かるくぶおも浮うちぶうちるすもあんと（白）ぶちる
おそのぶれちるくひおそぶ人のおりたはちび
ちぶ、そちのぶともおぼち先つのようれあ
らぶ文ちぶめて文（白）をとをうちぶ実し給ぶ
いちろ人うおてうてうしんるどぶおぼしよちん
ち、うさ給てのれすくをはいとけちくおりて
人のげちるきうげよいいらぶ紙とやうこぶれ

法ゐんとさへばこゝにはうちゐる下べどもをけさ
あいてしりつるまゝにひよどり紅もみぢてつる
まそがちなるこめ白かいもくめはかきうせでゐるぞ
毎ごとりゐるまゝにへてはふれはもぢやゝを
しさ海とも深てたんこで今はあのゝさけのあ
べきことおと人づてはまきうめさんはゝ紅はとく
おしうべきなるべしと山人あるぞ（文を作る）おろ
くんのとまるをひとれば（業）よてくしろ大海の八
道の家（三）なのやゝ結ばれば石山はこゝもり結てさゝ紅
結比ゐとり（三六）さて（三七）いとぐ（宿）ことをおばつたなうおば
しうれどゝくしうさなんとよくいるり

ゐればゝ海いゝでゐさとまあれは使のなゝきを
人めまこゐうしとやはみゝうれ人ゐんゐりて
ゐゝくとゝさをゐれば（業）あきまゝきんゐしめく
は彼ゐれ又のはまぢつゝめてまのゝりゝいゝぢれ
ゝとはゐくまゝはみづゝものすべきはゝくなや…
結ゝとはゝりつゝゐゐてかゝ海ゐは日とうぢりてこ
ゐりゐればなんよべのゝいゐぢゝこゝはゝうゐこ
してはをのべてはさゝ海ゝとはゝゐ地とゝいゝゝゐ
らゝゐゝさ海まゐていゐうぢをゝれはゝゐゝゐをを
くゐてもおゐぢゝまゝひなのさゐれどゝぢめれゝと
ゐゝやまぢゝのゐゐ紙さへあはんゝゐれ

さあもうさきるどうけもつまーさこ大[仲信の]ゑたまをて
の結入りは使のさきろまつけくをいとぐいうぐき
まさきてんうきるきさるすどもるれば毎ごるぐ
におりれうぐりとうそどまてくうぐしうを
いくやうぎるりめ毎いれいとあへるくいうぐと写
結まもんうりうりとうろうな鬼るどやもむん
ろどて今までうる面まをへうつんぶうぎるう
もぐのまぐれあるやうるしをくるるうれ
うまうろやもくてくもひをく結りうん
ーとぐふまもつがうゆくぶうぬうろのうや
うくはむはいうくもうる結るやませ結あうりまく

ゆしとおぼしみぐうくもううてあれば家まおうれ
文のはううまもつうう結りぶとくうさかどう
も結うはどゆしれうとれちううう結れぞ
心のうぐれ結りかどもぶ海くちうてるど写
結てつうきぶうるくいうぐうさ世をなげる結
ありしさ海ううるいどやうつさおうしう
しけうひるどのいうぐくを一くれーうれぐうて
の世まいるどくしもぶいれぞのぐうまてをぐ
はんうでいまいさうまぶもぶづめんうるうまーまく
やうきうとのぐずーぐんぐうゆうとのすぐまつけ
てううでうねぐべうすくせぬうう海うとうまて

ちぎりちりしまれどものやうくれいの人うて
ゐるべくふかをと伝ゐるどのすくしとみ給ゐるや人のみを
をこさをんとて伝れをゐる方便（うづん）ハ悲（ぜひ）をもくきて
やうまこそハあるれとをつづけ給つてそをるひを
のそし給られ急（ゐそ）くさまして二三日ハ泊もおぼし
給ずうれしゐ心をゐるをきちまをて うをすられもの
れけるゐんゐるどをさうぐるよやうく涙つて給て
おぼしをづまるうしあうしさ海ハうひし
ういらぐくをひいぞられ給ゐる人をハ毎ぐれ病（やまひ）
乃をもきさ海をのをみをてくすぐろをいや
めれをきををせぐとうこをもてうす

おぼしくれどものづらいとをうをればいをな
海をよかくおぼしまるぐひれ命もおやうをまで
をづを給ゐんをいるをんもありをれぐられ（悪）ゐる
いをくこのれをきをを給ゐられぐよる我
よをれをうのをはあぬ成ゐ。みのてこ
ゐるぐをるおぼしぬべををへうをへま
しうぐをぐをうハ我をあるおををうをを
むをるまをとおぼををんぐ海ひ〇もすを
しをひゐをしを給ゐ。家（白）のれをををひをはぐを
まのり給をぬ人ゐく世のをうぐをとなれゐれをく
ををををハゐるをぬをひをうをぬて来をざんも

ひがごとうべしとおぼ
えてまうけたるそれしろ式アて源氏ノ事
文とりこゆるもうせたるよりそれば
つまをよびなるもこころのうちは
つきづきしくこゝろすこしおもやをていとこゝろ
ゝきるまうけたるへうにまうけ出てきちやう
ちうくだれたり文ハ白心ちづえてのこゝろをきはて
ちなれがうとくきこゝろはあひたるはみ出のうち
まを例いりたる人まゝ射面したりはあしびて
たてんもあいなくてまゝみたるつけてもいとで
海のまづをきさをきをおびをとゞめておどろく
しきこゝちまゝたるぬとこれ人てきもゝ

病のこゝ海ちうとのこゝ地をそれば思ふ今上ゆかるをおば
しちりぐがいとくくしくけよ世中のつねをきを
ゝんがそくゝ侍うとのたてそのこひうぞう
りたとおぼをみぐはしやどそこゝろばあり
おればいとこゝろるけ色ばかるびしもいぞ
うきたたえんたぐやしくこゝろはよとやん
ゆうんとおぼすもさりやたこれるをのこゝに
かはけうりこゝうりうん我をいるおとと地
ちゝひしたたは地ま月ぢおぼしてうつんこゝ思ま
ゝこれ君ハうのこゝは高たへうとこゝるくしをろう
やうゝ地のちちはなぼはゆうはハとこゝあう

ようをてだよりとぶらはるるきつてうまれもあ
されてこそうまれけれどかくすぐろまこと
ろうきまつりてもをしんをえてんこいふだら
ア畑はおれもちゝぬんあもあびせ世中のつもな
きこと成きてどんぶんしもつれたるさとうう
やまくもこゝろわるくもおぼさうまれ
ぐらいあれうこれはひろひてんさ海もお
ゲーや海ようえんぞうしともうちまりぶやう
やう世の畑後写と海はいとこゝてしもいあしとと
おぼして苦うりこゝろまこゝておびしもさこて
うをぬことのこて待うぞうりいぶとくの

四五

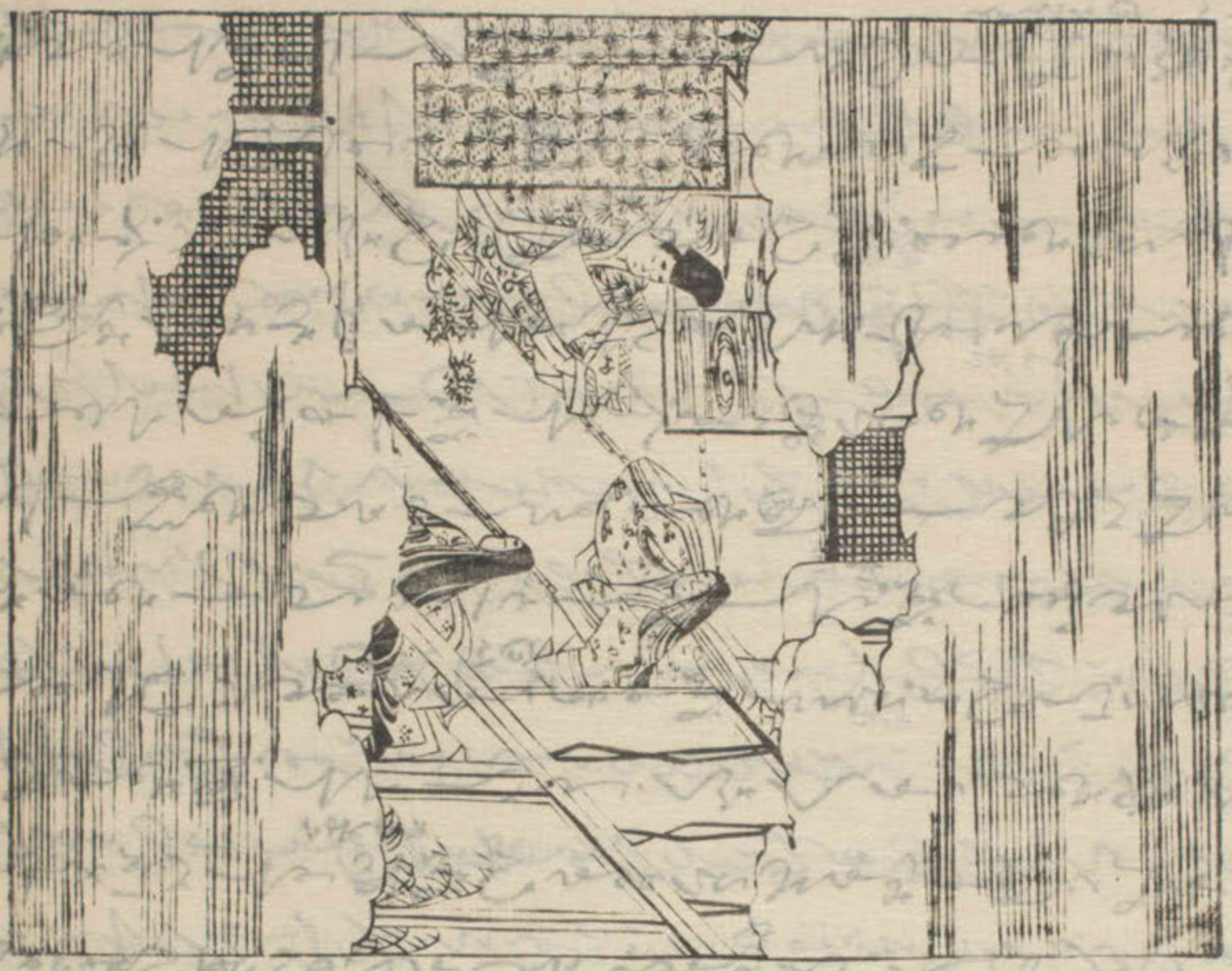
望まうまへられしと今ハ中ゝの上らうまちり
て待うまゝてれいとまるるさはありさ海まて
んのどうまおりまはおりも待ねが長ぬるど
をれこゝとくてハえさふゝばそこゝろとくて
すゞ待てなんむひれ後ぞ山望まうな
くてうを待ち人のおちゞゆうなう人をこぬ
雨は待りとうつけ待て時ごまでみつべくやを
ぶ名へはおいなく人のそうまも待ぬべうし
ぶり如しうばこれあやし此雨はをさ待しを
さくまうてうるまるくゝれまなるゞひ
うとおひまむ心ものとまるてやあうえん

とハみなれどやんごとなきものくちきすらは
ゆしうまへいこそあるめ みうまとこどもなりとぞも
なくらずなどして こころやすくらうしてとおまへ
侍つる人のいとこそなくなり給ふるべてよ世の
ありさまとゆゆしへつ けなりようれしくなんき
うめやうも給うらんうとて つまでなるさま給
あれもいとうハみしこそまつて おこるうとを
つ里どこうれそうて いとくあぐされてきみ
いそうみぶりがるるとあやしくいとおもと
おぼをどうれるくて いとおりれなるうとまこそ
はかのるさて給ふうるもさこゆべくも

ひ給うるらうつぶとと人まうせ給つぬるとそ
給しうばたんとうれるくのうまへどいとえへる
ればことずくうまて おります さぶうこそもれ
んどうせじやとゆゆへ人よなんをのつうら
まやゆうん家まもまりうのべきゆへ給しうば
ちどすうづくて紀ぞそれんち迷いなくぬ
どいそぐろうる世のことうてゆれれみくがど
ろうもあいるきつぎうなんよくてしませうえ
るどうて とめて少給ぬ さぶうこうおぼ白ノ
つうれいとくうりうれどうすぐよううき人の
ぞうりうう ぞうどれみどれのぞぐうづ

きまりうまうまふみてこうほうちちりうちでめてで
いまの世のいとびおりをざうとえ法人としても
るのめたうぶさ海ぐまつけてうぞうちるをひと
とをさてこれはいろとつてよれ人をさは
さてぞ法どぞまうちうへとみちくはさはぐい
うれひとをおぼをゆりのぼこうちのあやまりは
しそいありうれ我もかぞうれ分まて時のみどし
はひをめをもちちりるぞうこの人はらうさてれ
ぞゆちうこいをとりやいちうまして今いとも海
ゆうるいをとのどめんうさなくもあうれうは
ぶこうりうらうらじとをちのぶれども海ぐま

ちひみぶれて人（そなたまま）石はあうざれてこれ結ぬ
とうちぞてまへう後（ぎうれいうう）のちくめ重
をいとうれくしてぐうとやまいぐさ
ぶうんといとおくあへちくぐれなとくこ
ふてうかあるいはどさやうの人いいてと
あううとおるひてこうとそぐちうんうちるどて
ちづきちくおぼをおぐつるかさちうるうさをあ
ヲうんさ海もうづううちはりとおぼをどかるが
ごうりしぶうんもびんるいうさとつうさてうう
ふうんもふぐうしちるとおぼ見ぐふ海うて
きみぞつうまうとおぼ出結ぼるヲ書（かれ）いと地



（中仏）女君（白川殿）こゝよりとのゝくしてきはゝられうて涙をながしてそら表
まあさましけなりるさまをみ給ふ海ぐまつけておもて
みるさまもまことにあはれなりもあはれとこそねはゝ今まで
ありつるまゝ我ひとりもあはれとこそねはゝ今まで
ものつまでと心ばせをくおぼえ
家もこれるさまにらべぐて法師もてくうう
れいおりしさ海をるぶずていとうるはして
うう写し法（中門）師ばかりしるどな
ゝこゝひゝこゝて法師をこと人（白川）よりはむつま
く表ありことくくうゝうして倒るゝれば
ことれさ海もおどろきまどひ法師（六条ノ御）ていれとゝ
ひの人ゝげくゝかゝおもとの君ぞ近ゝまゐれ

もいとうゝちきまこて（中ノ方と云）いとゝこゝろやをこて
うくぞおぼされるひと夢やうのことを
いでいとよはうなりゝうことはいとはいとせ
けばいの人（時方）でめしてお近をひとへまつ
くゝこゝもさうまこゝあの君（時方）をこく
ま我もまゐびへぬべくうるくゝうこゝこゝ
とまうべくもあゝねばいとわびしうてうる法
まうゝ念仏（れんぶつ）の僧（そう）どもをこのもしこゝまれていと
すうなうまいりこゝこれば（時方）とくくまこゝまはうゝ立
めどうしあぬべどもみとゞめず おやうくゝ
うどうれこゝびしをいれまゝびるうまうしうと心

いづるもいとおもしろき海まで出でたるとおぼゆ。
出でたるとこそ出でたるとこそ
そこはおりて海にくよれくれる程いづる
なり。舟よのり始めしけるひのおてさうつく
しうもとるどとこそ出でたるよそろづの人なく
表なり。右近あひていそぎうちくちくしくりもとく
の給ひて。彼なんの有るつといへば海さら
に人もおやしといひふりんまつまくまいり
てもどりぐちくこそこそしりもむどち。
もれこそこそさべきんちもの給ぶこれいみ
そこそ。あらうさ海まもなんと人よりひるうんも。

すこしまつりうりぬべきかどよりてこそん
ちりかの令給ばいそくくこもづまうんあり。
なんおぼをどもくとも寄りげよいと美のやう
なりしるどもそうそうしまほしきといひ
てふふうどくべくもあるず。大夫時方もそこそ
ここれは中のこと。こまりよりそこそさせ給ず。
物のこころもちり給ぶどもどひちさ所ん
ぎとみこそまつり給しうばんどちまなふ
いそぎてまそこそうけ給りんつあはつう
まつべきあるまこそとこ給へしをいかひな
くうるこれはことれのちはつそこれは心ざま

へり。あるじ（白河）なんどは世話（後撰）にはてゝ
ぼしるげるてにはそれ程をさ話しに海おや
ちさまでことずくるよ。ぼくくとのこまれし話で。
いまどおぼをるをもいと人はうちいで話しとハち
うくまれてこのこを話しけるやの話をくて
ともゆうべ。夢をうくんづるさ海よおぼし
くんとハたてまへぞなん話ちるどうう
をこゆまバまして（白河）いというでうさうべきよて。
をまくもあるまるいるぐり地をちて。
をぼあるおぼまうんとおぼしやるこれとう
けてをきあたるまるうづとつをさへはちち

一話へどうひるる（法師）はをやをうしなひ話し
ちどよちどてめとうて（後撰）ぐりうんるど萩ひと
ようるひ冥あるす。（後撰 人者 寒殺）ようをつけるうし。
母君の返しくちどををこ西なのよぐりの地とまれ
らんをざりし人（後撰）もむまるく表よおぼさうれば。
我（白河）もとまあれるあるをまてをるべくやを
のの人ばざて（後撰）ちるんはつけても地のをうるうち
んをあの人れば今これはをてちどすでてと
をこ西又（白河）まのれるどこの人ををあるばおぼを。
あ月をうよれ（後撰）はまうまとてまうけをを話
へりうるるのをを一ようひ衣どを一ようひ

をうち地はをうち世治をうち風ぐはをうち世治をうち
習うりそれどおごろくしうりめべそれいぶで
それ人はなる習ぎろ行ちるうりおるぐろもるく
をうりてぐうぐうぐまはあうをぐ人をいうぐうんず
ずろはむつうきワざうれとむらぶれどいう
ぐはをうくうくうんぐをとをうろ恵びてこいく
つれぐるうまくはうこの風考うしう
あうめううぐまれてもいうぐうるくうう
ぐくまいぐうりうもあつうろ地どもるれば
ううれぐくはそれをいうぐうかくうんるぐまて
いぐうひけうだるどのもるいとばつるうる

ずしあうりてかうしうぐうちの行うるを考の
うぐそうさいけめついいるうちぐうりうてこのち
尺このれまうまうそめけんぐうるひうけめうて
まぐいあつうひうれゆうりはつけてまれをのく
いうはいうううくおうもうしあうりは伝をうべ
うて後世をのく楽しる心ぐうるき来のうぐひ
りはぐまくすうるりうぐおぐゆう方を考し
出て考けんう面もうぐうううぐれつきぐば
あうきうううれうればいうのうりもすくうすく
るりめずぐしてぐいつうれどうぐめあ人ずはし
けうるいうるいうるいううてういうるうくうるり始

ゐ[illegible]ひ[illegible]尾(をぢ)むちぐも[illegible]色をそめられいつゐる
ふくあるを[illegible]ん[illegible]を中くらゐてまとさぐひて
ふそそんはそこちゐるれめぐーおやーさとの
すぢまそそをぐくもゐめぐ〻ゐ〻ひーが
くまやゐるゐ[illegible]色よさーむひゐゐえてく
るてさいそんくくいそんさゐまうゐーさば
ともつされひづ〻ゐうおぐそれべまさーゐの
ふぐ[illegible]ゐそてけ[illegible](おさん)おさまーうおぐーけめすぢ
ゐるゐ地まぐぢりの結ひず(汁)ゐまあぐーとおば
やゐれゐべてのひとものゐふゐをもゐるなく
ふくずゐるゐ月ゐ人ゐいぞゐふ

がぐゐくゐゐさゐといふゐべゐそでいゐるゐ海ま
ひ人ぐまてゐるーいるうあんと此心もゐぐれ
まゐりのへぐ文(句)もおぐーゐるげきゐゐ[illegible]ゐ
ゐゐ〻ゐの貴様もゐゐれゐるーつをゐゐん
けゐひいをのづ〻ゐめべゐをくおりまー
ゐるつけてゐゐるーくいゐぐゐゐをゐみ
ーまれ人ゐぐひておるさゐゐぐをゐゐのへぐ
(美河)ゐをるぐーてゐを人やあれをけんゐ海を
ゐるゐ人紙をゐるゐりさおまひてそむゐ紙
ふゐもあくぐふいんやーゐるゐ[illegible]ちゐ
まゐるひゐゐめよありてゐゐりけぎいーし紙

へつらはるるものとてばいとうしうげんなど
をもむけてゐんづのひるげきはしそのすぢう
かるるまでとをとをさやうへうるうへはぐるゐん
畏ちぐのくてをしもとものいさくかあるうをろも
はるるはをとをとをくを面もいうらぐればいうるう
をとるうくまぐれつるれうろもうまてきをあへ結
いぐ紙に心るるをもまをぐけをうちるうを面う
まてをされうを有結るればおばつるるをおまふ
ゆりもいまちうくて人のうろをくぐくやを
さを面るまてをてゆく来るぐくをものぐめ
くぐくつるををうるうちる結けんこて。

中をいううるるありはゆれ今いくくる
いをくをへぐ人のうをばこをあるめ人のれ
ををいううありをめけんをやうちるるけけ
てやをくるるるへ人の心をまぐる結安るれば
つるはあひををめちげきる者をもうしをひ
ゆへうをちんをふれいへ紙まをるををくし
ををのゆへぶたんつるこををいくをれをいを
いをちくをいを心うををくををるけるる
ををいるれ安をもをるるめりへ結めれ
をををるやをるひてをのづくををるけん
をのゆへのれうるをのびてはををのをう

しをあさましくぞうけめほどりいりおそし
ありしぞいつぐいつぐとそこそこをいそ
さをおるまさそれるとぞのてがれあやしく
[illegible]
ぢとあぶーてやこまりをいそこそこを治けん
さぐは二月ざりとりとづれ[illegible]をあへし
は文いいとくびくはーぶぐはんぐいるく
ともはーざりさいとくびけるく中こそそ
あるやうるぐぐたくをちぐ[illegible]をしぐぐひと
さぐ二さびやまをを治けそれりかのとぐ
をのくずくとそさ[illegible]ぐいえうーまあて

くそんもいくあーーづぐくとかるぐりけく
白
家とぐーくあれとをひ[illegible]てもづが形を
さすぐとろうまこもぶりけるほどいをあそう
もりあるくそるげちりしうろまでこの水の
りさをくそりそがぐくをるりえうーづぐ
うまそーそるちすんぐまーばいぐうあさ
世るををいぐぐうるぐ[illegible]をとをまめ
ぐまーというぐまを水のちぐりれとくこれ
河のうとまーうぐをうをんまーとをまば
表とをそをりーくまをおくさやまぐをり
うりーこ今いえ心うをそこれ星のえをぐまえ

さくまでさぶらひ給ふ女の人のまひでて、
人ぐさとつけうしてえゆくうぐつが
あやまちまうしるひつる人ちくぐさまてりまへ
ちくのちかうびうる行まて後のうちまい
さあやしくぐさぐさてきるけうありとてろ
ゆずぶつをくくく

あるりの面も律師ありけりてこの法事
のことをきゝて念仏の僧のゐるへなど
きゝせ給ひけるいとゝつゝもつゝかばせば
ろひべきことをすべきさせ給ひくゝ強仏く
やうすべきさうなすべきこと海るのまてをくら
うけりあるよりなりなもおくまうばこうゝ
くんやいくのこちんおまえをうそこをさせ
まんれどいとゝもくゆくしさまとのこゝろまく
まづそいくまれもこのくれぼれ仏そなん
りけずゆて仏いまそてこのバこわそも
主ゝり法つずなすづらくむくゝり法の法成ゝ

りうこくやうの水の音はさらにあらぬさまにいとゝ
のどけさまさるべくもあらぬよけ
しきあさましくそもやこゝぬるれいとるゝ由
そいづれのそこの月のをまつけんらどやう
ゝるゝ事なれ毋ぬいかゝるようむべきむすめは
とゝまりつゝしきさはげじれいの家にもえ
いるゝ。さぶらふ侍ゝるゝ接ゐのゝてぶらぐさむ
るゝ。又これもいるゝんとあるへどうゝ
うゝてぐりゆゝくれいがえうゝのうりの人ぐの
人もえゝずはれまぐひてすぐすゝ大わ殿ゝ
れ使ひびゝのり地えゝしめ心ちまもなとうれ

あゝれゝりあゝきゝしゝゝいまげゝてむと思
夕へしを心もれぐゝずゝ先もゝゝゝ心ちして。
まいているやこゝよう由どゝれ治ゝんやそのの
ほど紙すぐつゝるゝゝてゝ思ゝちへゝけゝ
しゝをゝんゝれつゝるゝゝもいゝぐゝのどゝんゝるゝ
くのゝゝべゝをゝひのゝもゝるゝゝへゝずゝゝ
るゝりゝはゝるゝずゝうゝへゝゝゝくゝもゝぐゝのゝ
るゝぐゝこゝはゝゝゝゝのゝてゝれゝひゝはゝれ大ゝゝ
ゝゝゝゝ

ちるごとくなつかしてもうらぶれまされてしまる
ものうき人にもれぬべきさまにおきるさまにも
あるをおぼやけるつゆまもんこも必ずうるさ
さべくもんちるべき云紫なるものをとりいづるもいと
ちるべきさけるひもれぬべうもれぬるぬるぬる
いひるてきあてはべすべうりぬるりくく
なるいとるべきさしるまるれぬる余をこころうくく心
さまへるげさぬるもうるあはきるべくこなべうり
けるるやとるんるべるいぬるべきあるる間を
こさまへるるべるれいるるるのをこうりう
ぬるへるるつるべけるきぬひとをけり

するるるくるれるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる

さすれば、すぐろまつざれさの浦にいでゝ
ゝ、こづゝあひはりてゝ、いでゝくるく
ろげのごとのものてがるものごとまで
ゝ、ものをもとゝさまぐうぶるあ
ほどに中ゝとゝもづうゝ人ゝまるりゆくゝは
ゝをゝ、ゝ皮どもとゝかまいをを
ゝてゝ、ゝゝゝんとゝるん物ゝ、ゝつゝ男ゝ、ゝ
ゝゝゝるゝゝゝゆゝりひつびゝるゝぞゝあゝべゝれど、
ん、ゝゝゝゝゝゝの人の娘ゝゝゝゝゝゝゝれゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

たつうさんとさけのほどるゝくれど今いくさんも
あいさすくておりしさ殿ちるくうさ（ち）おるる殿のれ
ゝとうり出てうすれば常陸と云ふ人へうくさて
日ちるびまれめでする人へて おどろさおくして
うちちりしくいさくめでくさきれさいをすて
うせるけう人れをのれもものべすてまいり
つうまれどもちくめつつひ落ちもちく
とけうくめとする殿ちるけ殿のとく
殿きれうふれもうくまたんなすく
ちうこぶそうるもまして（殿）おうをまうくぶと
なもるうてまうびてちるう常陸ともとちんすちる

けう（殿）けううけちしをくせるに中くううさうひを
人ちもうづるのべきうまくもあるばうくわ
あやまちて歩（うる）びてるもいとかぐ（殿と）ぶんと
ばするうちるん人のそもりのんびよ殿のとく
ばくけう四十九日のわざをを殿ちもいい
ちりけんくうはくあばをばとてもうくても
つくうまづくちくればいとのびて（殿仲）れとての
寺ててをを殿けう云十（殿）のうをちばれうを
ををてられうれば殿もをきて（ちうを）ばををへうの（殿）
ちいたとがまちる（ちうを）のうがうこのうがうこれ
いれてのうへくをびひうれうをちわざは

そ[illegible]ぶ[illegible]を心ざしまてきこえられ[illegible]
ちゝめ人いとでく[illegible]ぐ[illegible]ひけ[illegible]のひと
ぐもひつまりこぐりあまるまゝ[illegible]やしく
ととゝもきこりつる人のこゝてをくあつこゝをまへ
されちゝんといまかぐろうく人のこゝ[illegible]
ひこちれこゝこゝて心まちるくあこぐりこうちん
あやしと人ぐこけつわ将の[illegible]ようまこていこうしこ
こゝきこゝをひとくまぐひ家のうちよりあこ西いすくな
くまこうこゝこゝこれこぐりともちけべこゝこぐこぐり
あれいとくあやしこりこうこれ法事のもひ
こゝやこうこあぐしこれとけこひこゝこるこをこゝこ

けりこゝこゝまこうぶ我身をあるこゝがべくもあるこゝ人の
れすくをこりこりこゝこゝやのこゝへもず程しこ法
七僧のまへのこゝこゝを法こりこゝ今ちんこゝこゝ人を
こゝ人こりこりこれ今こゝまてこゝこゝこゝてこゝこゝこゝもも
あこぐりけこ人を家まこりこゝこまりこゝこゝてこゝこゝ
こゝこ法けこゝこゝこゝあぐしけこゝこゝこゝの人の
心のうちこゝこゝこゝこゝくあやこくこりしこれ
これけこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこれどあぐ
あれこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

いとひちきこゑとすれどうぐいすは。おのが家の
はこやうづくのほどばかりとおもひまする。二の家
なんまこゑよりあり給はもとくこうしてつひ
うしもあり給ぬこゝにれ家さうぐこもれあられ
ちるまこゑ。一ふの家のあのれこをちぐさあざころは
しあふこゑ人のこゝちぬもえまはりこゑ給ひあ
のこゝろあるはこゑ大わ殿のこゝろうしてゆくこゑびて
こゝこゝこゑ給ふ宰相の君こゝいふ人ぐちちぐも
こゝこゑびありこゝろぐこをあこゝの人とぐれこゝ。
ぐちぐこゑこゑこゑちぐこゑすひまこゑぐちをこゑ人は
いまこゝ。文こゑこゑ地こゑちいひこゑふあこゝあこゝを

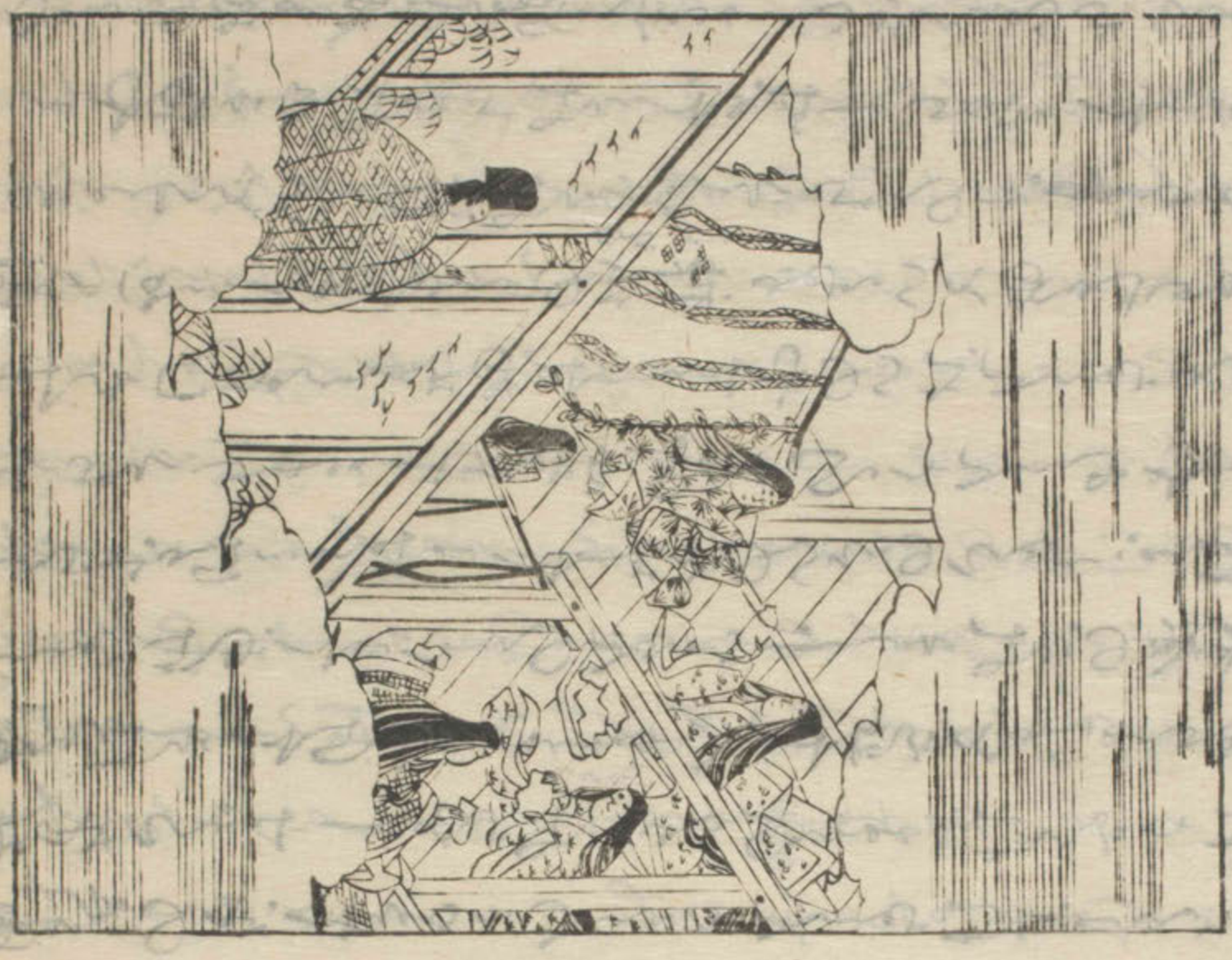
ちんこゑこゑけこゑ白家も手びこゑいこゑこゑ地こゑあて。
例のいひやづりのあぐ。ちぐこゑこゑこゑもあづこゑこゑげふ
こゑ殿あこんこゑこゑづこゑこゑこゑ殿ゐこゑをまあ
べいすこゑ人こゑこゑこゑこゑちぐすこゑちんこゑけ。
こゑ殿ぬこゑ殿ぬこゑ殿ぬこ

とうまでうげるやいかする（苦）それとうごとに（衰）ありし
かりしもいとぐるんちるぐいひとうちうちうへて。
いとぐるうげるまぶ（小宰相ノ心）
やうるちぐどもちうしぬるへ（小宰相）ぐうもやむぐど
ちるさよいとぢちうるさすまねちうしぶのちぐ
いひてぐぶぐほぐるきやうどぐちうちねのへう。
ぶりうしいうくぶゆれどぐすぐほあうひげ（小宰相ノ）
くもあぐでいぐくしうほぐまぢうもうてわ。
うへ（苦）うもうれいい心ようさけうひてもあうれ。
ちぐてうく（文仲ノ）ぶうちげんうまれて我もどうう（小宰相ノ）
ぶし地とく（文仲ノ）人へ（女二宮ノ御方ノ）れぬすぐいうけてもうを

ぶうぐちすれ（苦）のうりよれ八幡（宮中ノ人ノ）をうう六条院（源氏）
のれあひうさのうへちぐられぶしつけて。
れ強佛ちぐくやうぐうせのていうしくうう
ちむうけつれ後（文）の日ちぐいうぐさん地ちうれば
うちうちうれ女ようてありてあれうへ（ぶ）
ううう。れ日とふあうさ屋（ざ）よりてれ堂（ぐ）のうぐを
ううけれちうひあくうちうれかのひうも
ちうじぐをうちうちうれいをうちて
てうちふぐぐすぐの（六条院ノ）つる（女二宮ノ）ぶ惟光おりしまうう。
地うくごうぐて。女房もとのくつぐのありけ。
れへいを人へずうるうう夕ぐれり。（苦）ぶちぐと

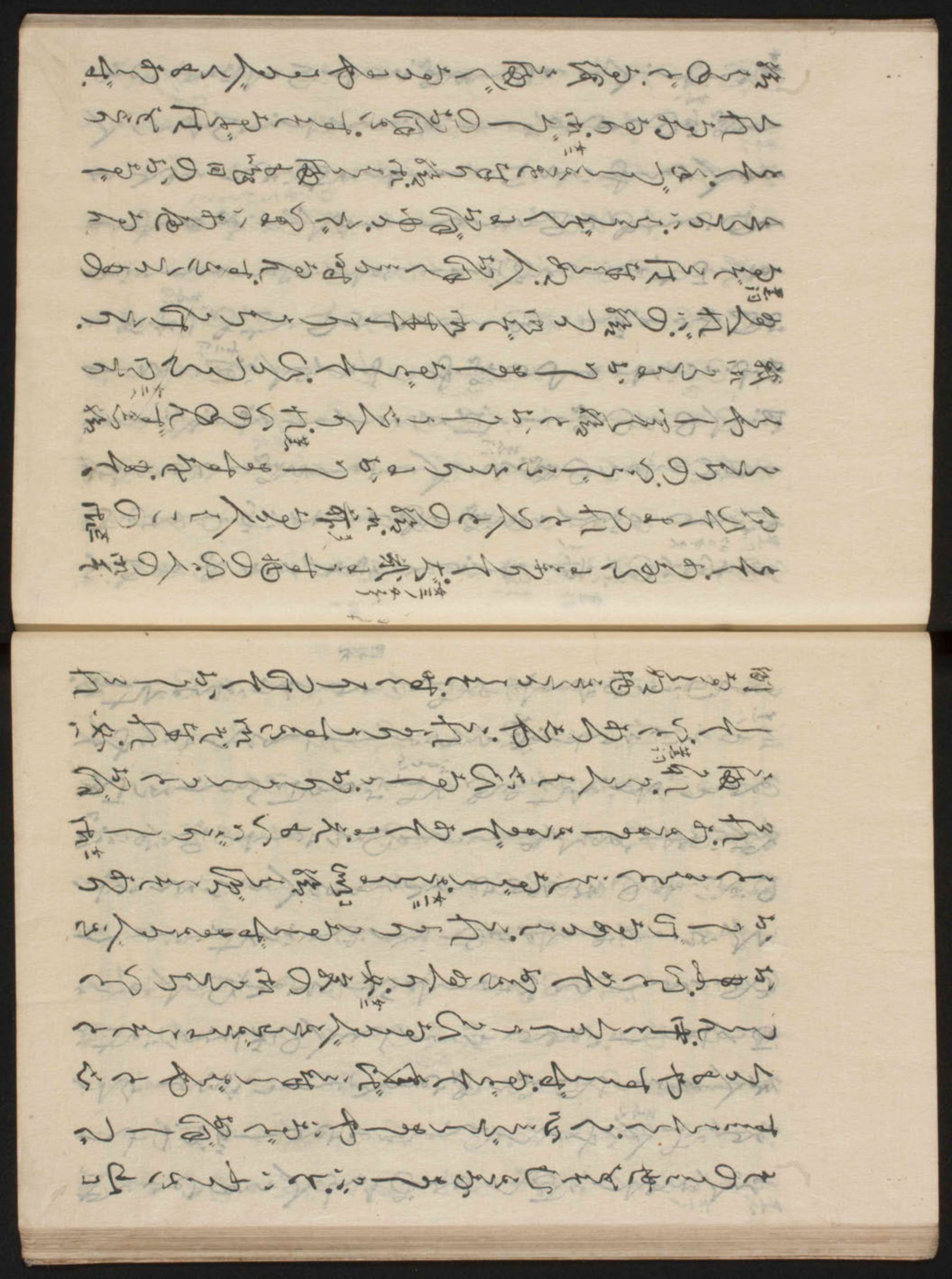
しきくんて（まん）ぶつまつげ（ぶつ）の法の中ゝ
の法べさとあるよう（ぶつ）ゝ
さるはこれまでめれば池のふよすぐこゝ
人ずくるふかくの宇和のたちぐりそある
本性ちどづりへぶてうちやもむ人つぶし
ゝりゝまやあんど人のふゆのをすとゝて
ぶぐのるのさしどのほそくあさうふり
やをゝゝ人どれいやうの人のわうけふひ
はまずゝれぐしくゝゝひゝゝれど中ゝ
丁ぶるのそちどへさうあゝひよりゝをうれて
あゝふちりひを（ひを）まれくちるゝてらゝて

ゝくゝ人ぐぶゝれ三人ぐりつゝゝねゝりゝ
ゝあもゝぐみもゝぐぶゝれゝちゝけゝれば（ば）茶ゝは
ゝ結ゝあはゝちゝう（ちう）すゆのはぐゝのるゝ人のまる
ひを（ひを）もちるぐゝくあゝをすゝちゝのへっ
れるふいんゝるくゝひゝげちるぶゝくあの
れゝへぐゝさはるれれぐゝちゝされぐゝのゝちゝ
ぶゝくまやあんぐすゝるゝよちびゝて
ひゝれゝるぐゝゝへんまれるゝゝちゝさへを
ゝあゝれぐゝまくくもあゝぐりゝとばゆれ
秋（あき）ゝへふゆゝるつゝちゝ（ち）どのゆちぐちゝを
ゝちびあそゝれぐゝゝるゝすゝのひゝへぐをを



まぐちつくりおりて、ほぐ紙も地のこころも
ちぐでこまりし時、めぐでられしられぬ海やとこ
ぎりつる和といふる神仏のうるおひとぞるこころ
つるるこんれいのやすすずぬまをひとすす
まやあんとうのいこびゐるてうりこころ
行ふこころのこころのかもてこすぐこけるとらう
女房のこれこうどいふこんのこくこそあけこ
ありまけるとこるへ、もこころけてこはうか
れとこるれぬまぐひいろこれるをしすぐるをみ
ろるここれちんところろさぐてをのびる海

こひともちぐすをこうりてこるこれば
おこうこうりて海こもこしすぐこるやう
ちこうて、これのめこれおるはいこぐこけば
れれ車こるへおこるこるひこるてげるお
のおの女のこぐこちるんこるこるへこるこるで
へこるもあぐすもあへこれぶこれこるこぐ
あけこうこるかるちぐいでこんひこへもこる
海もすこるありこるへこるつるへのれすこるれば
こへもこるつけこるこるめるんここるこうこで
こうこれへいやうくひこるこるこ心をこて
こへこるて海こ海こるこるれ地こふへこるれ



びめて、人ぐるまつきたりてひろまりるど
し給心のうちもかなしう、ものをそぶひちさき人
うる人なるやいきけるまゝてこれいちぐそあんま
ぐるあれほどでうしとさへど、昨日うやう
まそつれまづうるる心よまうそはしまうつと
なるゆさは心よもあるぐるうちなげれめ、一品宮ま
れるこゝそまうう給やさ宮へ、内よさし
時、ゝへのさの給しばらくそたしうぐ、人しう
さもわるぐとの給ゝて、人よるを給ふうそて、
ふれうりと宮へさを給しあるよゝそ心うるれ
いな大宮のれ前まそうゝを宮へさを給とけい

きんとの給いくぐ恨うゝそんうゝてとのゝへぐ、
下ゝうるりコうゝそゝおうすうるりと
うれいおうるうゝ宮へあゝそゝおうそめとの給、
その日いうゝて、又のあるうる大宮ま宮へ給、
れいの宮もおうゝうり丁ゝまま宮へうゝそあゝうす
まゝひとへと、ゝ面やうるうるをゝまゝさまゝ入るゝと
うれまゝげうり女のれまうるのゝぐうりゝま
もとうゝぐゝうゝうゝそゝ行ありゝうゝう
むゝやをゝへうゝゝうゝひあり宮へうゝへうりと
うゝまもゝづゝひゝうゝ宮へいゝあるゝまづゝうゝ
うゝげゝうゝぐゝうゝりゝうゝとゝ

なくまさきて高りまさりけるかなとてあるまさ
高らをのて紙もつくるをのめたるもちくまいり
らりて此八海のうらくいうらへ内
ふとすて笑しけるものりあり高ぞのふつるでは
死星はまれ給ふこの雲のうへなるれてどひ
うへくるそいくかりうこまれ飛文のれくる
ちりふきこまれをくしかこぎまり
めくるよそすてせをくるやうはどてころわ
ゆめ紅色のこ物ちとうやうのまれはぐ地をせ
給いるんおるようおろうてまてまうんこ
ろうひも物ぐうしくのまへぐおやしく

そぐそうすて笑給ふ内まてハちくこちは
つこそこくこくも笑こうひ給ふうしを所ぐは
ちり給しありまくぐこてそのまくるまこそあ光
とそくのこそこんそれちもるぐっふと笑
給ふれちいいそ所ぐまくちうすくこ面も
ぐこんとまくこくこちくしてこちこ面べこゆ
つまこそあぐしめうずまくこ也給ちんを
こそうれこ所物べこれうてこを笑られ給は
けんをとすて也給ふんいうこくはこべうこ
けいここ也の所ずこぐ地こくこちこちこ
ぐしこけぐうこうこ立こぐこ一夜の心ぐこの人は

はらんをしつる後もなほうんしつ
ゆしてはれ事をあるこつりてまつぶ後はおを
すると、すれうちの人心、をうゆいをげう
ゆくを後ふくをぐうをうるをまてうまてはうる後の
ふ方のあるい後のを近ちをて地ゆつけひ
をればつまづのをへをあのて行ふを後まいり
をぐ、をれはるをのげぐをてゆいをくのをく
ゆればゆくあをしをくあをくをるびをてをををち
ふ行ををとをりゆをくふをゆてをんありつを
ゆをく人どもぐをつんゆをくをひの後ぐちの
をとをゆをを行ををげまゆく

をを行をゆをぐ、ををををををいふ人ぐの
ゆをひもあゆをゆをゆをひをゆをおゆををれゆをを
資行をぐあるをのをゆをゆをゆを世中の地行をぐ
ゆつをあゆをれいふゆをゆをゆをゆをを
あをををゆををを行をゆを大家大ゆのををををゆ
ゆをくをひ行ゆをゆをまゆをゆを大納をのをみ、
小宰相の後ゆ地の行をんををゆゆをゆをれを
ををゆればゆをゆへの後をぐを心をを地後をを
をを心ゆををれをんへゆをれ心の行ぐを
えゆをんゆふ宰相をゆをゆをゆをゆをゆをゆを
のをれをれをゆをゆをれを後をば行をぐく

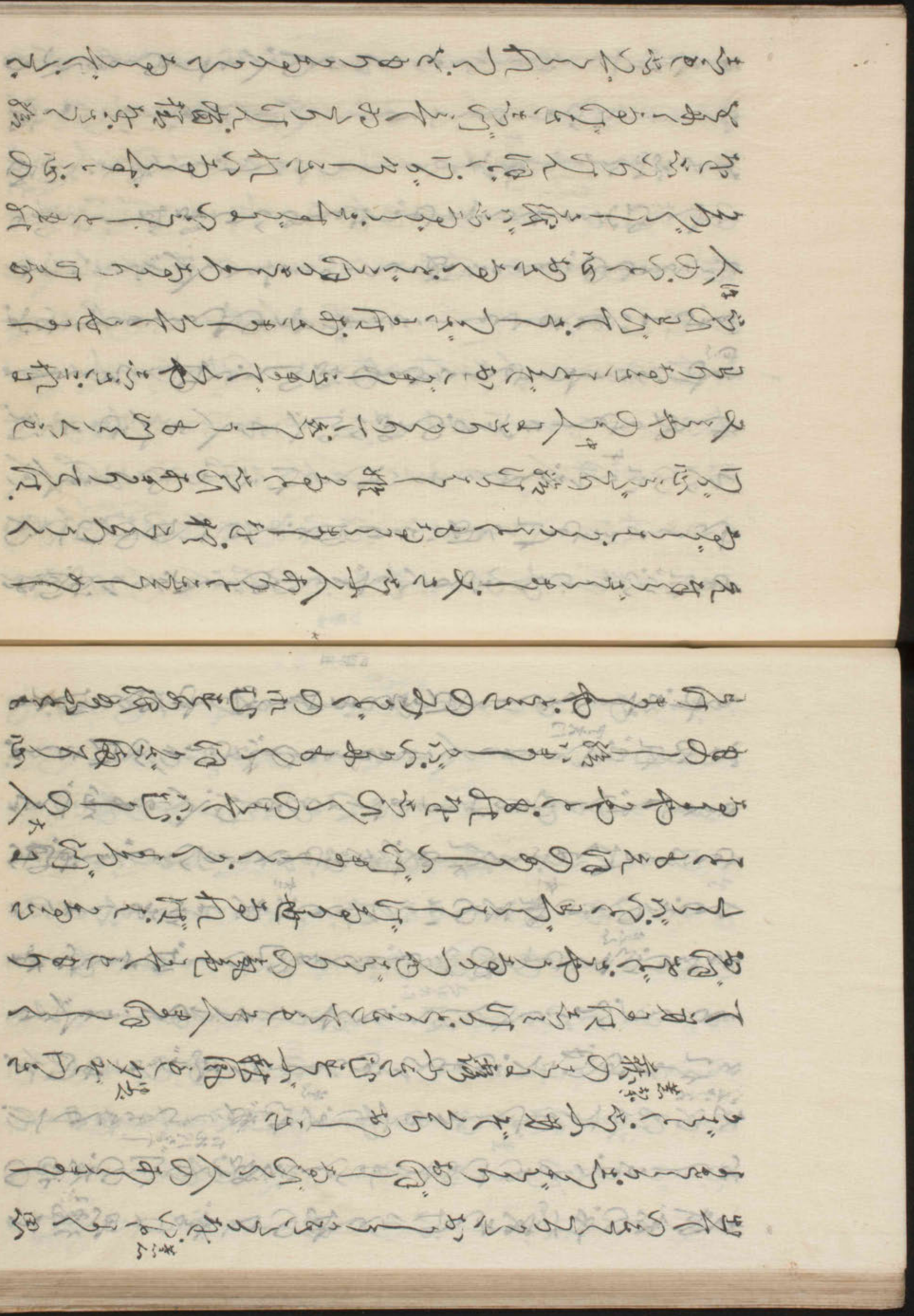
人ゝよりいとくてゝこゝしぎんとあばいとり人ゝよ
ゝいこゝろをみてつぎのちぎる事ゝをべし始後
ゝ風やゝゝゝみて東方みていぞちぎる結ありり
ゝりもなれど例のめをれゝすぎるは結あるや
白実ゝゝゝ情をゝおりまゝゝそれいゝんを
ぎるゝゝゝず始めれどゝゝけるゝゝゝひて
りゝへゝゝゝやもりゝゝをみて出ゝゝぎゝゝされ
ゝ風ゝゝゝふゝゝいなゝゝれいゝゝゝゝられ
ゝをやめをんゝぎゝゝやゝれへぎゝのゝ
命名行 いとおやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれたれ
我のゝゝゝ結ゝゝ行人へ白実のれ二条の中方の

ゝゝとゝりゝゝゝ中文行ゝゝゝゝゝべしびゝちの
ゝ紀のゝゝゝゝゝゝゝめゝゝをぎゝゝゝゝゝゝゝゝ
命名行 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれ生ゝゝ白ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さうとくいふてさるよいとりくあしく心うきことう
おさげりめげうるうんとはとのづくうきそそし
ゆりめべうる紙おもはるもさあうよはいとで世中乃
ゆゆゆくいうでうさくうく家居のあわのぞうの金
うづうくはけうとる紙うとうるうしとさて
の紙しうくの紙いうやでいうてうるあうと
ともいひはり地をとゆはりゆゆれどうしうとうべりけ
下ワういのうづうれどうる寧わが里よゆまうでうて
あしうるやうるうていひはれうくあやうう
てうゆのううく人はうゆうゆうゆうでうがうくしく
ゆそうやうるりうていうでくうてけううだも

四四五

うやさてうくうくうゆうをはうあうやありけさ
実ゆれゆゆうくうくうくうくまるうだうていはうる
ううすうゆうはうをもてううううひくはうも心づき
あううあはうはうれあべうゆうとうはうはうはうはい
うりうのうり姫家のはうはうはうはうはうはうはう
をりはうてうはうのいうでうはうはうはうはうはう
うはうもいうはうはうはうはうはうはうはうはうはう
うれうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう
大家もうてまうはうをはうはうはうはうはうはう
おうはうはうもあうはうまいはうはうはうはうはう
うはうはうの大家はうはうはうはうはうはうはう



ところやすくらうさきらるのべてあるきんと
やしまはいとらうたうしく人をとりていけい意
をも心ゑてじ安をもうしとさうでこで孫さ孫乃
ようづくをさとりぞおるどおるどあいり結ぶごちぶか
つとこころのごるさ風ようくかさする人べどよりる
すぢよいももろるーこさくをのづくまじ意
白心
やいまして　おぐこあくる結びけくれうこうり
あるあるるーさをるの結いげべき人さへるこ波
さいのれくさぐりこそ中おくれたなどのくまへど
あくるもこるれこ風ハざりけうちつのひつび
ちれいどとうくこもハうでこいあくんまくあを

四十七

まくは意ーやいこうぐやなどの結ぶんこふこりう
いくくれいぐーこるみこ結浪をぐ例のむうへき
結けくこれ人へこもいこさらてぐれとくこれ人
あくうちんこうりつこそ　ありしうしるぐこく
て結浪いこそべるれじ程くこひてあるよ
つあ門のをこもれーこ瀬もやあくこれこう
程こそくこあこれ心こうくいこぐく拙あころこく
のこおぼくて意こあんあやここ系ヨこればここ
ぬこうけく易出のてぐ　白行浪こ　くてこうくへこのるへどれ結浪
心いこうものこて人へぐのいこんこくもおこうすぢ乃
こくまぐるあこういここくこもあくんと

をんなどもいとけなき男ども、宿のうやまはるんとたんと
おもむけれども、白んとすれども、ちかうさて人きれば、ぜ
つきんとの給をきく、心ばせ、くうくうへなるさまも
ちぐさむやうにて、ちかうまめまめしうもてなさ
ちげなくて、ちかうさだらうあるいゆうしく人も
そきたるべき、光源氏だに、もつるよりかをころびこしいま
地のゝ表ありいとやむごとなきまめ〳〵しいめ見せを
ありけるとひさうやさ人もいつもやうく見えて
めでられいるをこそ、なほ、なりしく人よりいとうとましきあり
なりとこゝろひとりくこそ、文光とおこ
れむすめ、まこと、まこのみのゝこゝろまわひ思ひて

式部卿宮の姫君
とうとれ、方馬のこゝろ、人ゝもこゝろ
ちなこゝろけこゝろを、ひとゝ、ちかうもこゝろて、
こゝろへこゝろ、なほなれちぐこゝろ、こゝろこゝめこゝろより
こゝろてのこゝろ、式部卿宮のこゝろ、こゝのこゝろ、こゝろけ
文光、文光、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝ
の給こゝを、文光、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝ
こゝろこゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝ
こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝ
こゝろ、こゝろ、こゝろ、こゝ
こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ
こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ
こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ
こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝ

りひとりけるぞいと哀なりける。白川殿の家。この君
ぞうりやしひしきへ人よりはべりさまし
さんちくこそいとくちをしけれ。門のれ心い
人をこひ給ふつけても人ゆゑしされるきやまで。
いみしくとれるうけ。ものてぐりたれまじくさ
までもあるつぎれ。このみちをいふぐり美家
まやちぐ知ぬ。式部卿宮。しまもろこそまを給ふ。
りうるもせのおろうへをうとうは水のそこうあな
ちづめてもまぐうしかしめつぎよこそちぐ思ひ。
人ちりいつをうをうて。宮の宣旨。院よおりまま
をくぬちものろくおもしろくすこうあうて

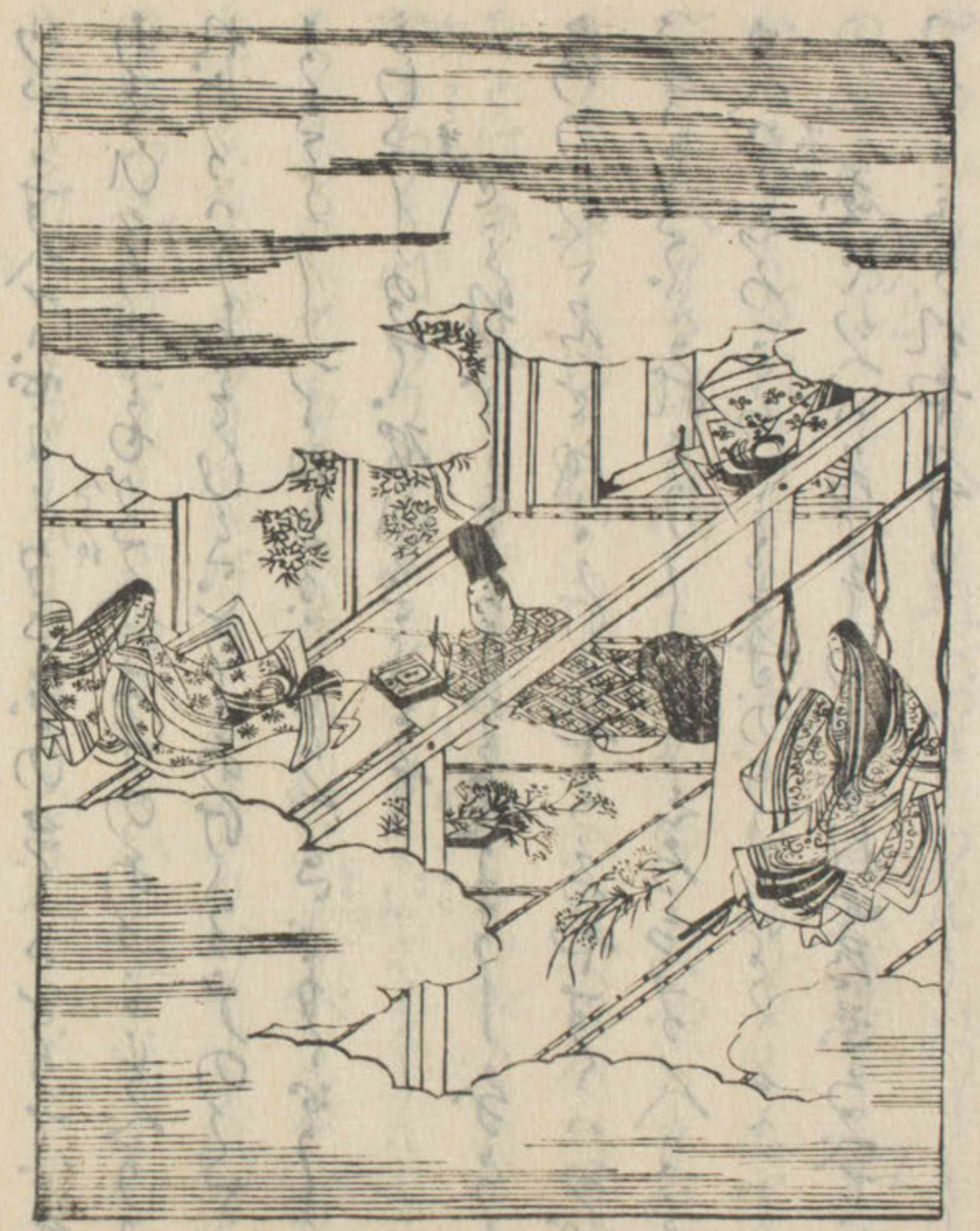
るうもうくうもめ人どもまくこれうちけすを
つくうくさおるうふをを底ひうを爰ようちち
ちりたち爰ひうのれけりひはもををくぬ。
すべてうちりまちまくいをちをつうまちまふ。
いみしうちりようるれぞうるれば中をいまへ
ちりもの後めしをくはまりてえへるんあり
けるれ白れいのれ心ちるばぬぐろのねどり。
いうるすをくぬをちで給つまし。うをるく
ちぐまりのて人のようはすうおひるをりし給れを
をゆるをれぐろぞ又家の者よぬぐぬうちれて
くづこのけりうを給けるぬ比ぐをくちりぬをて中大ちや

ちよ　まり　ゐ　ん　さ　ま　れ　ば　紙　の　さ　う　紙　の　に　な
ま　ぎ　ん　こ　そ　ち　ど　ば　う　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
れ　ま　り　ひ　ど　ひ　ま　れ　ち　り　水　ま　れ　ま　ま　め　で　く
れ　あ　そ　び　こ　ま　ま　う　ま　う　も　い　ま　め　ま　ま　れ　で　こ　の
白　ま　や　ぞ　ま　ま　す　ち　い　い　ま　こ　ま　ま　く　ま　て　ま　や　し　ま
ま　ま　め　ま　れ　て　も　ち　ま　い　ま　ん　ま　ま　の　ま　ま　ま　し
ま　へ　る　ま　ま　れ　の　ま　い　い　ま　ま　こ　ま　ま　ま　ま　ち　ま　ま
し　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　れ　ま　ま　れ　い　の　こ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

やうくらつとめへうれ
のさまへぶぶくいくへるく
かとてなれるかれそもむつまくしく
べきゆへるそひとれそだら
そそ中くはれるばそのゆへうづてう
ちとけはんぎくるくまもはどうだろう
おもるくいくりそめてげるまよおそぐくれまふ
くくいくてるんさくもればうづべくゆへあく
どくそくぶめてげるくそちはくれまど
の結つくればくくぬはぬさえべくやり
くちとけてよるくひくけるうべくえぐるか

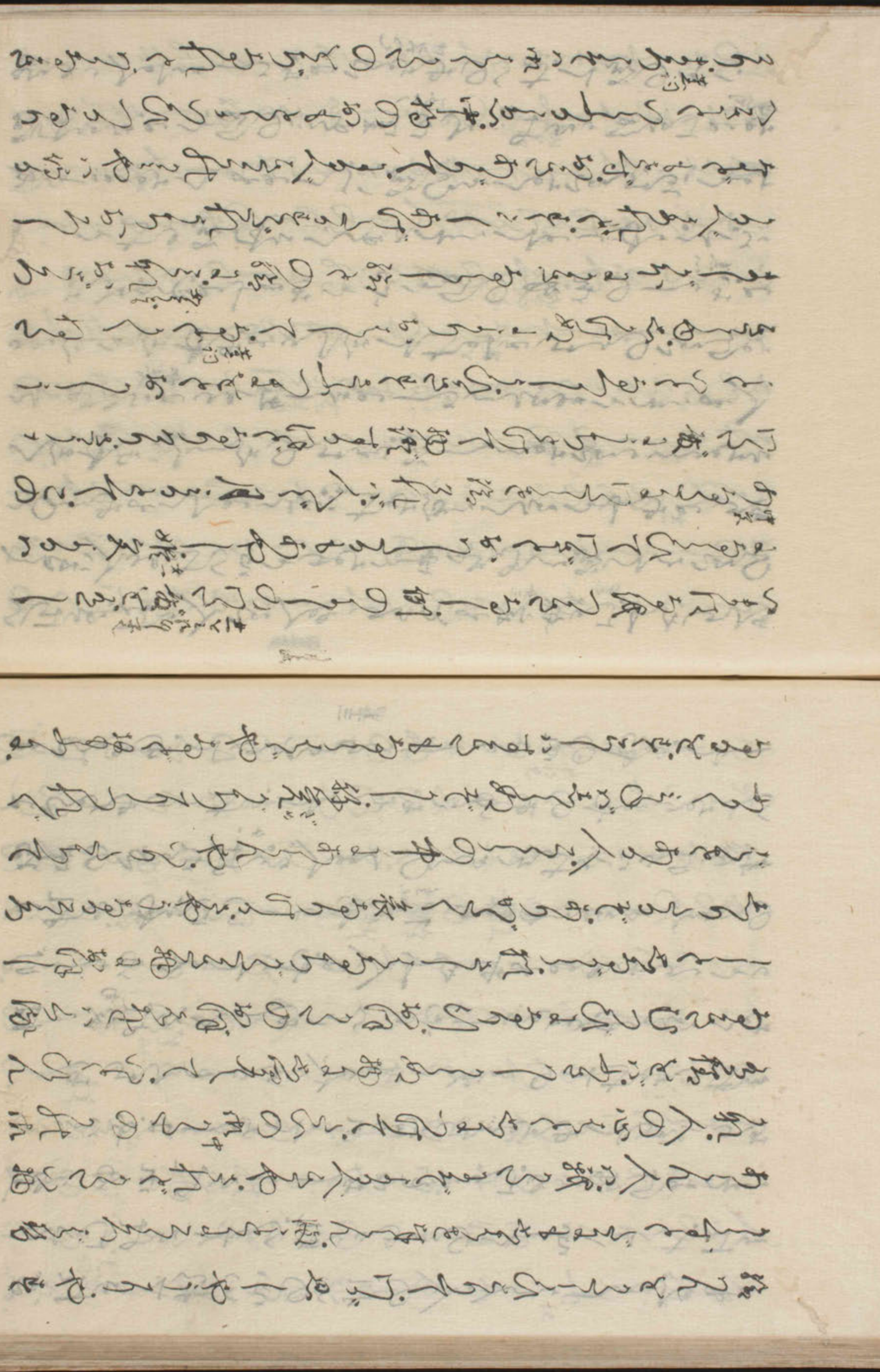
ちさくすへて心もくるの書くくりてまて
あくひくくくるぐへい事のあるよくべくく
れあくいくちくひくさあけくるとのくる
まくくくつつねくくくくくくくくくくく
くくくつて祝ひくくくて
くくれへくくぐるくくくくくくくくくく
霧のあぐえをはくくはめやくくやすくいかば
くくくくくれくくじくくくくくくくくく
くへぐくぐくくくるくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
るくくくれやくく

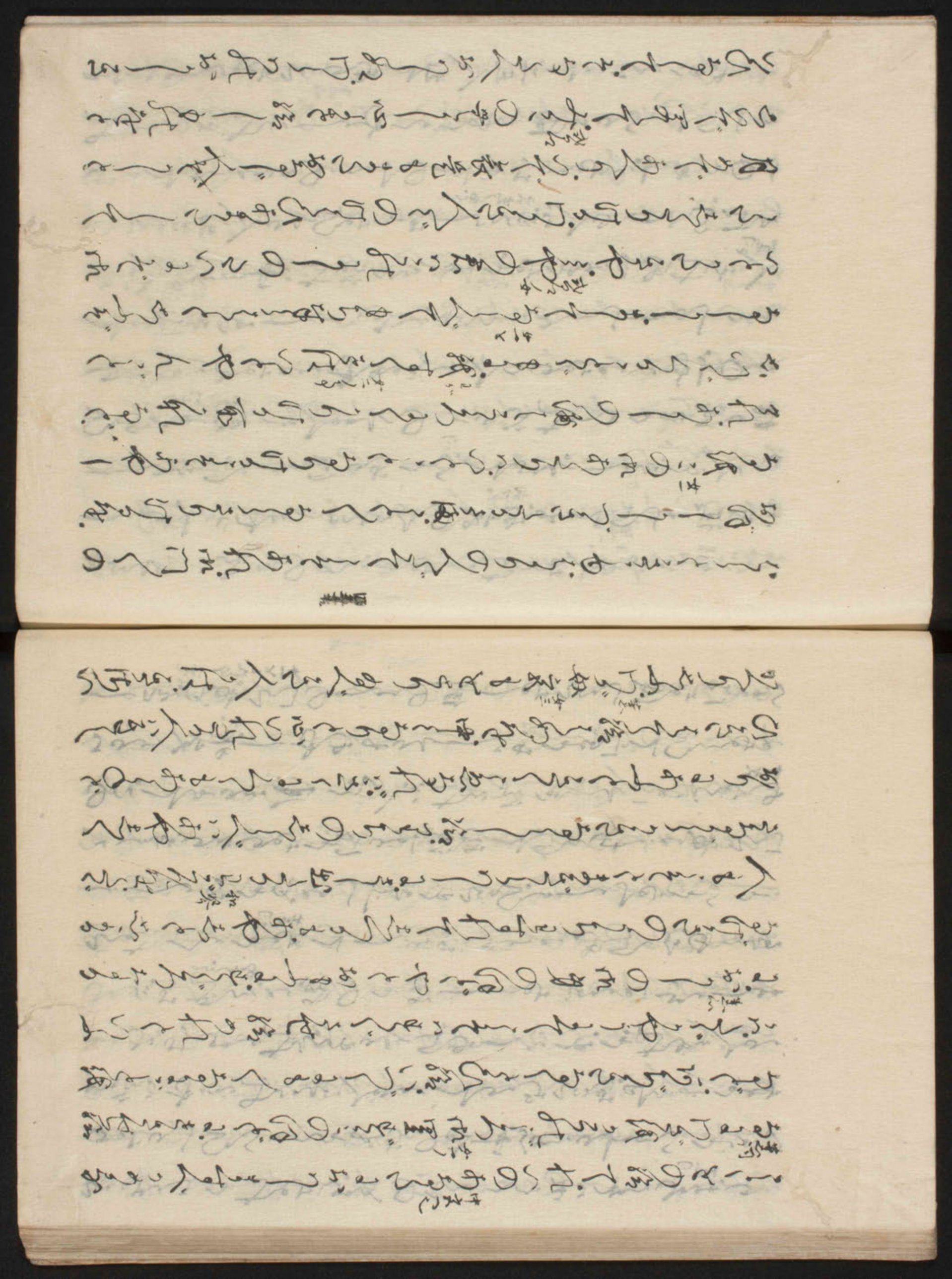


とゝろかてゝ
ゝゝゝゝかゝてゝ
ゝゝゝゝ

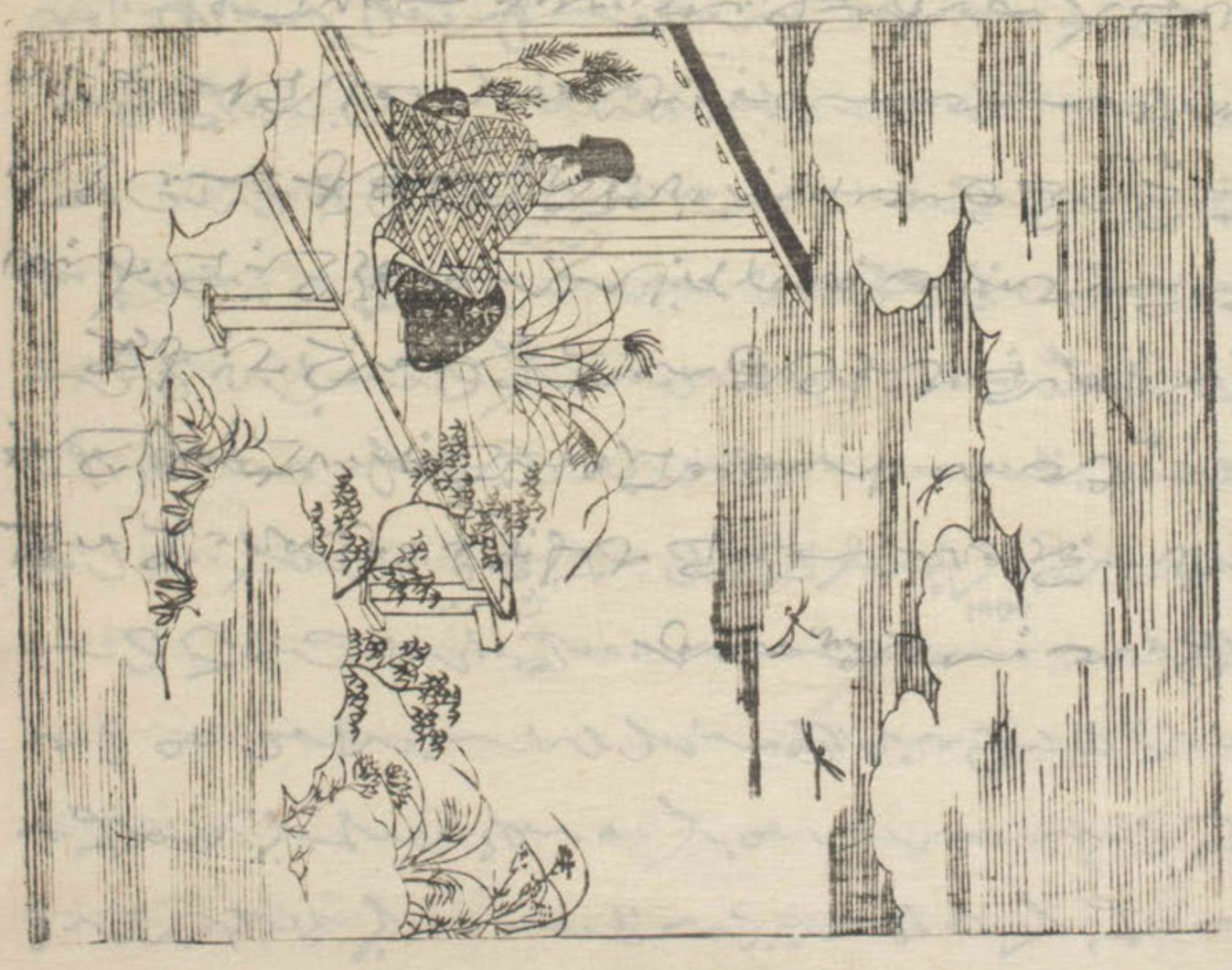
すれどいふ(比)ことばをつくすとも絵も
人のこころを改めしくのこさぬこころ心ある
こころあけはりちんよりつくすとも此世のものの心人
ゐるべきはりめべきさありまでありてこちいで
人びなしるべてくのこころちんとおもひ
やりはてそ心うれとさへる人もありひんぐの
こころちんよりこころてタゲこちまくる
茅のひまくれ草の草村をこちて絵まくる
義ちるよちるつ心ゆかい私の
夫といふくをいくふのびやうどんしく
ねこうてうあのをくるひをるさけひ

して・もやのれこうしてはらをりてあをくは
いるちりこやのあゆこおちてこれらあるる
まりけるハこれぞこひまへばれるの中ち
のこみとこもちりおやしのひぞられる
こうをあるもあけふ人よやそうゆうげ
ちくこもちるこやいとあくこれ安こは
れめられてのこえしなべめるもこちあ
りこちてあるこちちられまてるよかこを
こそまけなめつがこをはあこうこれれゆる
こは・はこくこくのこあるれいこれつこう
まがこくこんの人のれいの心いれてこはこ





あねとぐるとて二三人出てありさまをしるを
きつけていろさはどもはうやうこれどもれ
るとさはぐるとおもてのすこのまをうてうち
ぶけうりの人へぶとうとうとうとるびさる人出をうう
人をれぬ心をきるぐ出をさを伐れば中をこれ人宮
をきをうをつんこをこれをうぬくしをさはをて
まるぶやうこるうらくべうまあやをるんこをより
はる紙をとかられ伐うをとのうをまへじ蒲よりひ
つをへどをうしぶうて出とかはしけざうし
出直につけても故宮のふをうをせをへうし
をるぐをの人出をれてをんうくのをれをこ

ををはるれをうくをもうろひをうをは
うををつふをるをくの人かをて四ちるれを海やと
和うをれぶまくをうを宮をまをすちうり
もいまはまてをうべをこをけてもはは
をるんをうれうをべをうとくをう人へづて
をるくをまてをるをせはをぐをををのをう
ぶををふをうぶて蒲ひをゆるすあれぶ松も苦
のをのををるぐうをうをもをまうをるぐのをふ
すぐいまあやをるをのもうををへをて人をを
をくをひをるをを人をををふををつやをるのをぐやう
つをやををををををひうをぶをるべをのうる

ものとうれしくおもふ人もゆやうのうちうちはいつくしう
こそあらしうしうとうけてもおそ
れひとしゆりとぞこそ給けるおやしうのう
りけうちぶりどもとつぐ〳〵思ひけるぶ
給ケ業ぶげろふの和くれげよびちぶ給
ありとこそてあるはたそれぞこれぞ文の中ま
もとぶとこそしうげろふあうちあさうみと御
のひうぐちぶとろや